

哀悼の意をこめて

若手社員はなぜ自ら命を絶たねばならなかったのか

21才の彼は無念にも8月20日の未明に自ら命を絶ちました。彼の遺書には、昨年12月に新台車組立装置に足を挟み怪我をしたことが大変悔やまれており、そのことにより自分が他の仲間から取り残される不安、自分がどう見られているのか、将来の希望を失うことへの失望感がつづられ、そして家族にあてたこの間の感謝の気持ちなどがつづられていたそうです。

このことから、新台車組立装置完成直後の労災事故発生に彼は、労災で休んだ期間を取り戻すために、かなりの周囲からのプレッシャーがかかっていたことは容易に想像できます。そしてこのような悩みを相談出来る管理者もいなかったのでしょうか。

業務優先が招いた不幸な結果

労災事故は、会社が新台車組立装置の十分な検証を行わなかったために招いた事故であることは明らかです。その証拠に会社は、事故発生後昇降装置の改修を行っています。そして何よりも会社は、新台車組立装置を稼働させることが最優先であるがために、大きな事故が発生したにも係わらず、その当日新組立装置の完成を祝うため、所長を始め多くの管理者が出席し酒席がもたれました。やむなく参加した社員も多くいたと聞きます。本当に彼の気持ちを考えれば中止ではなかったのでしょうか。

二度と悲劇を繰り返さないために

ご両親は、息子さんの死に「この会社で二度と同じ思いをさせる若者が出ないように」と東海会社への思いを述べられています。

しかし会社は今回の彼の出来事に「不慮の事故です」「静かに見守りましょう」と総点呼で訓示し、また管理者は「詮索はやめましょう」などと必死に自殺の原因が会社に起因したことを隠蔽しようとしてきました。このことは、彼の死を無駄にしないための両親の思いを踏みにじる行為ではないのでしょうか。

私たちJR東海労は、彼と同じ思いを抱く社員をこれ以上増やすわけにはいきません。東海労は聞く耳を持ちます。些細なことでもどしどし相談してください。東海労は、相談の内容が会社に漏れることはありません。

2010年9月9日

JR東海労大阪台車検査車両所分会